

別室対応が必要な児童への支援について

不登校児童の状況

昨年度から別室が設置されて以降、定期・一時利用者も含め 15 人が利用した。対象児童は、昨年度の別室利用は部分利用だったが、4 月からは別室にも慣れ、毎日別室に通えるようになった。また、一昨年度から教育支援センターに通っていた児童が、校内別室があることにより、毎日別室と教室を併用しながら過ごしている。

具体的な取組

○教育計画の作成

教職員で確認しやすいよう、新たに教育計画に「不登校対策」の項目を作成した。「不登校対策委員会の目的・年間計画・対応」、「ステップアップ支援シート」、「別室対応」等を掲載し、教職員で不登校対応について共通理解できるように工夫している。

○教職員間での情報共有の強化

2 年前から不登校対策委員会を月 2 回開催し委員（管理職・SC・SSW・不登校対策担当教員・別室対応指導員）で情報を共有してきた。本年度からは、詳細を伝えられるように、学期に 1 回ずつ低・中・高・専科教員も委員会に参加している。

また、児童のステップアップシート等を作成し、支援内容や児童の状況を見える化することで、現状を把握・共有しながら支援計画に役立てている。

○安心できる学びの場と居場所づくり

児童の学習意欲を促進させるため、校内別室指導員と一緒に、計算などの練習ができるアプリケーションや、語彙力を増やすためのアクティビティなどを取り入れ、楽しく学べるような支援を行っている。他の児童と関わりをもつきっかけにもなっている。



○オンライン不登校支援サービスの活用

別室に登校することや外部の関係機関との関わりも難しい場合には、区で連携しているオンラインの不登校支援サービスの情報提供を行っている。

成果

昨年度は、別室担当指導員との関わりを大切にしてい、週 2、3 回で 90 分程利用していた。

本年度からは、朝から毎日別室に登校ができ、無理をさせないような段階を経て、通常の学校生活を送ることができるようになった。また、教職員の校内の別室に対する共通認識も定着してきている。

課題

固定の空き教室がないため、毎年、場所が変わることや、校内別室対応指導員が一人のため、利用児童が多い場合に対応するのが難しいことが課題である。

別室支援を経験し、教室に戻ることができた事例について

不登校児童の状況

対象児童は、深夜までゲームを続け、朝起きられないことが続いた。登校することが難しくなり、生活リズムも昼夜逆転する状況となった。家庭に協力を依頼してもゲームをやめることができず、保護者も対応方法を困っていた。

具体的な取組

○登校支援

まずは、朝起きて登校することを目指し、別室対応指導教員等が保護者と連絡を取り、朝迎えに行くことから始めた。夏頃から徐々に、保護者と一緒に登校したり、一人で登校したりすることが増え始め、登校時刻に少し遅れる程度になり、登校が安定するようになった。

○担任や専科教員からの働きかけ

登校後も動画の視聴などに時間を使うため、担任や専科教員から働きかけ、学習活動からできそうなものを選択して取り組めるようにした。学習活動に取り組んだ時には、多くの教員から褒められ、自信を取り戻すことができ、その他の学習にもチャレンジするようになった。

○保護者との連携

登校を促すために、保護者との連携を重視し、家庭生活での課題などを聞き、共に解決策を考えた。学校でも動画視聴などをする時間を減らしていくとともに、動画視聴をせずに我慢できるように、当該児童の得意なことを基に他の楽しい活動を経験できるようにした。

○安定した友達関係の構築

友達との安定した関係を築くことで、学校が楽しみになるようにしたいと考え、休み時間は一緒に遊ぶ、下校は友達と帰るなどの取組を進め、徐々に友達と楽しく過ごすことが増えてきた。このことから、教室で過ごすことができる時間も大幅に増えた。



成果

別室対応指導員だけでなく、特別支援教育担当指導員も親身になって関わった。一時期、別室でも不安定な様子を見せたときがあったが、校内の教員が協力して指導に当たり、多くの教員と信頼関係ができたことから、教室で過ごすようになった。

課題

校内体制を見直し、不登校の全ての児童が登校できるように整備していく。

校内別室を活用した不登校支援について

不登校児童の状況

対象児童は、現在小学校6年生で体調不良や摂食に関する不安を主たる理由とし、3年間以上の長期欠席状態にあった。教育支援センターや保健室等を利用しつつも、継続的かつ習慣的登校は難しい状態にあったため、6年生1学期から、SC・担任の紹介で別室利用を開始した。

具体的な取組

○校内におけるチーム支援

週5日1限目開始前から別室対応指導員を配置している。さらに、SCやSSWを含めた校内支援体制を構築している。長期欠席児童に対しても専門家や管理職・担任を通じ、別室利用の提案を図る等、学校との接点が途切れないよう支援を行っている。

○段階的支援と自己決定の実現

当該児童の体調に合わせ、登下校を主体的に決定できるように、指導員が遅刻・早退時の保護者対応を行っている。担任の対応可能時間や時程に影響されないことで、学校復帰への教員の負担軽減を実現した。クラブ活動のみの登校や、別室登校後すぐの授業参加も選択できるよう支援している。

○学級担任との連携

週に数日のみの登校でも配布物や行事等の情報が滞らないよう、指導員と担任間で情報共有を行い、学年の動向を把握している。SCとの全員面接や学期ごとの定期健診、卒業アルバムの写真撮影など、当該児童が自己決定をして参加の選択ができるよう連携を進めている。

○別室内環境の整備と工夫

利用児童の様々な状況に対応できるように、パーティションで区切られた個別ブースに加え、集団ブースを設けている。集団ブースでは、他学年の児童や別室を訪問した担任との交流に活用している。



成果

当該児童は、1学期から徐々に別室利用日数を増やし、2学期には週2日のペースで継続的に登校するなど、自分のペースで学校復帰を選択できている。

別室内でも友人関係を構築し自主的に学年を超えた交流を深める等、活発さも見られるようになった。

課題

長期欠席による学習の遅れへの対応や、当該児童の進学に対する不安へのサポート体制の充実が課題である。

教室復帰を目指す不登校支援の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校中学年の頃から不登校傾向があり、一昨年度では一度も教室には入られず不登校となった。昨年度の2学期から校内別室の利用が始まり、週1日から少しずつ利用日が増え、本年度の1学期には毎日、別室登校となった。

具体的な取組

○特別支援委員会等の実施

管理職と特別支援教育コーディネーター、担任、学年主任、特別支援教室巡回指導教員、養護教諭、SC等で特別支援委員会を年に12回開き、当該児童の様子について情報共有・分析し、支援方針を協議した。



○担任との信頼関係構築のための支援

初めの取組として、担任が空き時間や休み時間を活用し別室に来て、当該生徒と関わる時間を作ったり授業を行ったりして、担任との信頼関係を築いた。

次のステップとして、放課後の在籍教室を利用し、担任と二人で対話をするなどして教室という空間に慣れていき、教室復帰につなげた。

○学級支援へのスモールステップ支援

昨年度は、別室指導員が給食を準備し、別室で食べていた。本年度1学期に全日登校ができるようになった頃、当該児童が教室の廊下まで給食を取りに行った。最終的には、当該児童の意思で教室に入り、給食を食べられるようになるまでのサポートを行った。

○居場所における心理的安全性の確保

現在は毎日教室登校ができているが、今後も校内別室が当該児童の安心な場所であり続けるよう、別室指導員は日頃から挨拶を交わすなど、見守りを続けていく。当該児童の困りごとや悩みなどが生じた際は、気軽に立ち寄れる場所になるよう、別室の環境整備に努めていく。

成果

別室登校の際は、スモールステップの支援を行い、教室で担任との対話を重ねていった。学校行事への参加をきっかけに、本年度、高学年の2学期前半に学級復帰することができた。

課題

今後の支援として、登校時は「教室で過ごす」ことを大切にするが、チーム支援を継続していく。

別室対応が必要な生徒への支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 2 学期から家庭内でのトラブルがきっかけで学校を休むようになった。2 年生の 3 学期から担任の働きかけにより、別室利用を開始した。

また、別室の利用者は、登校はしているものの対人不安や心身の不調により、教室に入ることができない生徒や、長期間不登校状態であった生徒など様々である。

具体的な取組

○校内に居場所を 2 部屋設置

毎日 8:45~14:15 に開設し、校内別室指導支援員を 1 人配置している。当該生徒は話すことが好きなため、誰かと話しながら学習することが多い。他の生徒には静かに過ごしたい生徒もいるため、別室を 2 部屋設置し、目的別に部屋を分けて利用できる環境を整えた。

○小テストの実施とオンライン授業

授業で行われる漢字や数学などの小テストも別室にて実施している。その結果、当該生徒も成績を意識し始め、以前よりも学習意欲が向上した。

また、生徒が希望する場合は、教室から授業を配信し、別室でオンライン授業を受けられる環境も整えている。

○生徒一人一人に合わせた過ごし方

校内別室には図書やクイズなどを用意し、生徒の興味や状況に合わせた過ごし方ができる環境づくりをしている。

歴史かるたや漢字カードなどの備品を活用し、学習しながらコミュニケーションを取り、人間関係が築けるよう工夫している。



○教職員と生徒の関係づくり、情報共有

生徒の登校時、下校時は職員室に挨拶に行くようにし、教職員とのコミュニケーションを図る機会を作るようにしている。

別室利用を利用している生徒の情報は、校内別室指導支援員が毎日記録し、全教職員間で共有している。

成果

当該生徒は別室利用を開始してからほぼ毎日登校し、他の生徒ともコミュニケーションをとり、良好な関係を築いている。また、今年度校内別室を利用した生徒 10 人のうち 2 人は教室復帰し、2 人は別室であれば毎日登校できるようになった。

課題

生徒の状況に応じて、校内別室が安心して登校できる居場所となるための工夫を常に検討していく必要がある。

校内別室での教室復帰に向けた取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は小学校低学年から教室に入ることが難しくなり、保健室への登校を行っていた。要因としては、集団に対する不適応と考えられる。

中学校に入学後も不登校傾向は継続しているが、校内別室への登校は安定しており在校時間も増えてきた。校内別室内で人と接する機会も増えコミュニケーションスキルのトレーニングの場にもなっている。

具体的な取組

○支援会議の実施

管理職、特別支援コーディネーター、養護教諭、各学年担当、SSW、特別支援専門員で週1回定期的に特別支援教育委員会を開催している。当該生徒の様子について情報の共有、協議を行い、学校全体で支援していく体制を整えている。サポートを行っている。

○ICTを活用した学習支援

学習面では、個々の生徒に合わせた対応を行っている。利用生徒の興味・関心に応じて、学習教材や図書を準備している。自分のペースで学習が出来るよう、どの学年からでも学び直せるタブレット端末の学習アプリを活用し支援を行っている。

○コミュニケーション力の向上

学習だけでなく、職員や利用生徒のコミュニケーションの充実を図る支援を行っている。ボードゲーム類を用いた交流や折り紙等の創作活動を取り入れることにより、リラックスして過ごせる環境を整えた。



○SC、SSWとの連携

SC、SSWと連携し、早期対応を行っている。担任と支援に関わる専門職が連携するとともに、生徒、保護者に寄り添う支援ができるよう、定期的な面談も行っている。別室登校の生徒の様子についても別室対応指導員と情報共有を日々行い、細やかな支援を行っている。

成果

当該生徒は、中学校1年次には午前中週3、4日程度登校していたが、2年生になり、ほぼ毎日登校、昼食を持参し放課後まで別室で過ごしている。教室に配布物を取りに行くこともできるようになった。

課題

学級の活動や行事に興味をもつ姿が見られるようになってきたので、今後は様々な活動への参加を促し、教職員等が見守る体制を構築していくことが課題となる。

児童一人一人に寄り添う 学級との『かけはし』づくり

不登校児童の状況

対象児童は、小学校3年生であり、不安感が要因となって不登校になった。小学校2年生の3学期末頃から不登校になった。保護者の指示には反発をしている。朝、登校前の保護者の指示に反発をして学校を休むことが度々ある。

保護者からの聞き取りでは、全体的な不安感により、担任の先生やクラスの児童・友達との関係に少しずつ壁ができてしまったため不登校になった。

家庭環境の不安定さがあり、幼児期から教育相談を受けている。

具体的な取組

○体制

- ・支援会議 1 (校長・担任・SC・SSW・支援員)
- ・支援会議 2 (担任・SC・SSW・別室担当指導員)
(週2、3回ほど情報共有の小会議)
- ・校内別室指導員 1人
(月・火・木・金) 8:20~14:20
(水) 8:20~13:20

○校内別室の利用

別室登校が始まり、まずは当該児童の取り組みたいことで過ごすようにした。落ち着く環境づくりとして、別室内にパーティションで簡易個室を作り、提供した。その結果、次第に、プリントや課題学習を自ら取り組む姿が見られるようになった。

○声かけや会話による関係づくり

共同作業として、まずは別室で過ごすための時間割を一緒に作成した。この時間割には、学習だけでなく読書や遊びも織り交ぜる事で当該児童が楽しく過ごせるように工夫した。

別室指導員は、当該児童の好きなパズルや折紙などを一緒に行った。



○担任との連携～学級復帰へのスモールステップ支援～

学級に入りやすくするため、まず、プリントや課題など受け取りに行く際に付き添うことから始めた。

そして、徐々に別室で過ごす時間割に、当該児童が参加できそうな教科を加えた。学級で学習に参加できたときは「偉いね！」などと声かけをし、保護者からも褒める声かけをお願いした。

成果

別室での組織的・段階的な支援を続けていく中で、学級参加ができる教科が少しずつ増えた。気持ちが安定した日は一日学級で過ごせるようになった。2学期からは、毎日学級に登校することができるようになった。

課題

担当指導員が5校時までの配置のため、6校時や委員会・クラブ活動などへの対応が課題である。

校内別室について事例報告

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校 1 年生であり、小学校高学年の頃から、体調不良で登校が安定せず小学校卒業まで別室と保健室をほぼ利用していた。勉強は苦手な学習に興味はなかった。中学に入学しても、日によって体調が安定せず欠席が続くことがあった。登校しても教室の授業に参加できなかったため校内別室を利用することとなった。

具体的な取組

○生徒と面談、生徒の思いを聴く

小学校でほとんど勉強をしていないため、中学入学後、授業を受けても全く学習内容が分からなかった。体調を整えながら、できれば中学校 1 年生の勉強に付いていきたい、都立高校を受検して合格したい、このまま 3 年生になると思うと学習面が不安との思いを聞いた。

○校内別室と教室をオンラインでつなぐ

日によって体調は落ち着かないことが多かったが、学級と同じ授業、同じ課題に取り組めるよう支援をした。生徒は勉強すること以外の学級活動に参加できていたので、担任及び友達との関わりは良好だった。学習に関して生徒の思いを丁寧に聞き、ICT 等を活用し支援をした。

○生徒の学ぶ姿勢と成長を褒める

学びたい思いが集中力を高め、「分からないが分かるようになった」と喜ぶ声が増えるにつれ、体調が安定してきた。教科担任のところに自ら課題を取りに行く中で、教員のさりげない声かけが授業参加につながった。



○2 学期、教室復帰のため別室卒業

オンライン授業の定着から教室復帰に至るまで、教職員の支援だけでなく、生徒自身が学習に対して諦めず取り組み続ける耐性が心身ともにプラスに働いた。この気持ちの変化が自信や成長につながり、教室復帰できた。



成果

面談で学習面の向上を生徒が強く希望した。その思いを教職員で共有し、体調に配慮しながら、常に励まし応援した。生徒は、少しずつ努力が成果として現れ自信となり、学力の向上につながった。スモールステップから、学びたい気持ちが行動につながった。

課題

現在も体調を安定させるため通院をしている。学びが定着するよう、今後も教職員と情報共有しながら見守っていく。